

英語学研究の成果を英文法教育に生かす —冠詞を中心に—

高橋 保夫

0. はじめに

これまで冠詞に関してさまざまな研究がなされてきているが、学習者が直接自分で実際に冠詞を使う時にすぐ利用できるようなものはもちろん、教師が簡単に学習者に提示できるものも非常に少ない¹。そういう観点からすると久野・高見（2004）は学習者が直接利用するにしても、教師が利用するにしても、きわめて役に立つものである²。学習者はわずか3つの規則を記憶しておくだけでほとんど冠詞の選択について迷わなくても済む。このささやかな小論では久野・高見（2004）の冠詞の取り扱いを例にとり、英語学研究の成果を学習英文法にどのように生かすかを探る。

1. 英文法教育の必要性

ちょっと考えればおかしいとわかることであるが、コミュニケーションするのに文法はいらないと思っている人がいる。「文法は学びたくない。英会話だけやりたい。」という学生がいる。文法が頭の中に入っていないのにどうやって、文を作り出していくつもりなのだろうか。「文法」という語はいろいろな意味で使われるので、「文法は必要ない。」と思っている人が指している文法は、英語を使うのに必要と思われない文法用語などの知識を指しているのかもしれない。

文法について知っているのと、自由に使いこなせるようになっているのは別物であることも事実である。極端なのは、Krashen による獲得（Acquisition）と学習（Learning）の区別である。前者は native speaker の文法を脳の中に獲得しているのと同じ状態になっていることであり、後者は教師の説明や練習問題などを通して、意識的に文法規則などを覚えていく過程である。理解可能な十分なインプットによってのみ acquisition に達することができ、learning をしてはいつまでたっても、その状態にはならないという。つまり、Krashen に従えば、教室で文法を教えることは全く意味のないことになってしまうのである。これではあまりにも希望がない。しかし、外国語環境で英語を学ぶ日本では、文法教育が役に立っていないはずがない³。英文法教育は絶対必要なはずである。問題は、どのようなものをどのようにして教えるのが一番効果があるのかということである。すべてをカバーできる体系的・網羅的な文法書が必ずしもいいとは限らない。いかにすばらしい一貫した体系を持っていたとしても、そういうものはどこが重要であるのかわからなくなってしまう可能性がある。native speaker と同様とまでいなくても、文法を頭の中に内在

化させるとすると、少ない規則で多くのものがカバーできる方がいいに決っている。次節では、この点において、いかに久野・高見（2004）が成功しているかを見る。

2. 久野・高見（2004）

2.1 不定冠詞と無冠詞

- (1) a. I had *an egg* this morning.
b. You have *egg* on your chin.
- (2) a. Look! There's *a chicken* over there.
b. I like *chicken* better than pork.

(1a) は、朝、卵を 1 個食べたという意味であるが、(1b) は、あごに卵の食べかすが少しついているという意味である。また、(2a) は、あそこに 1 羽のニワトリがいるのを見てごらんという意味であり、(2b) は、豚肉より鶏肉の方が好きだと言う意味である。

以上から、不定冠詞 a(n) + 名詞は、明確な形をもつ単一の個体を表し、冠詞のつかない名詞は、個体としての明確な形や境界をもたず、「単一体」ではなく「連続体」を表すことがわかる。

さらに、次の例をみてみよう。

- (3) a. Our family had *a roast chicken* last night.
b. Our family had *roast chicken* last night.

チキンの丸焼きを 1 つ食べたという場合、多くの人は (3b) と言うけれども (3a) も可能である。なん切れか食べたのであれば、(3b) のみ可能である。家族が食べたのは 1 羽のチキン全体ではなく、食べ物として焼かれた肉の部分であり、1 つの明確な形をもつものとして意識されていないからである。

この考え方で次の例も説明できる。

- (4) a. You have *a hair* on your collar. I will take it off.
b. She has beautiful blonde *hair*.
- (5) a. I want *a room* of my own.
b. Is there *room* for me in the car?

(4a) の a hair は、明確な形をもつ 1 本の髪の毛だが、(4b) の hair は、髪の毛 1 本ずつの明確な形や境界がなくなり、それらが集まって連続体をなす毛髪である。同様に、(5a) の a room は、壁やドアで仕切られた明確な形をもつひとつの部屋であるが、(5b) の room はそのような仕切りのない空間、場所を意味する。

手段や目的を表す場合と言われて来たものも統一的に説明できる。

- (6) a. *A bus* is coming.
b. I'll go by *bus*, not by taxi.
- (7) a. There is *a school* at the foot of the mountain.

b. I go to *school* with my sister.

(6a) の a bus は、明確な形をもつ 1 台のバスであるが、(6b) の bus は、交通手段としてのバスで、明確な形や境界は意識されていない。(7a) の a school は、明確な形をもつ学校の校舎、建物であるが、学校で行われる授業、教育を表し、単一の個体ではなく、連続体である。

さらに、抽象名詞についても説明できる。

(8) a. I will make a *speech* this afternoon.

b. *Speech* is silver, silence is golden.

(9) a. I made an *important revision* in your paper.

b. Your paper needs radical *revision*.

(8a) の a speech は、1 つ明確な内容をもつ話し、スピーチであるが、(8b) の speech は、そのような明確な形をもたず、連続体としての話すことという意味である。同様に、(9a) の an (important) revision は、具体的な 1 つの (重要な) 修正であるが、(9b) の revision は、そのような具体的な個々の修正ではなくて、より一般的で連続体をなす修正することを意味する。

物質名詞や集合名詞についてはどうか。

(10) a. I save *money* every month.

b. I need a *ten-dollar bill* and three quarters.

(11) a. I bought nice *furniture*.

b. I bought a *chair* and a *couch*.

中学校や高校では、money は数えられない名詞であると教えられるが、お金がなぜか数えられないのか不思議な話である。(4) の a hair と hair の対比では、1 本の髪の毛を表す場合が a hair で、髪が何本も集まって 1 つの連続体をなす毛髪が hair ということだった。お金の場合は、紙幣や硬貨は明確な形をもつ単一の個体なので、a ten-dollar bill (1 枚の 10 ドル紙幣)、three quarters (3 枚の 25 セント硬貨) のように a がつき、複数形にもなる。しかし、これらの紙幣や硬貨がたくさん集まり、1 つ 1 つの明確な境界がなくなって連続体をなすと、英語では、money という単語が用いられる。そのため money は数えられない名詞として用いられる。同様のことが、furniture についてもいえる。いす、長いす、テーブルなどは、明確な形をもつ単一の個体なので、a chair, a couch のように a がつき、複数形にもなる。しかし、これらが集まって 1 つの集合体、連続体をなすと、furniture と呼ばれる。

(1) から (9) で見た名詞の場合は、1 つの名詞が、明確な形をもつ単一の個体を表す場合にも、明確な形をもたない連続体を表す場合にも用いられた。一方、(10) と (11) で見た名詞の場合は、明確な形をもつ単一の個体を表す場合と、明確な形をもたない連続体を

表す場合で、異なる名詞が用いられている。しかし、明確な形をもつか、もたないかという基準で統一的に扱うことができる。

2.2 定冠詞

(12) a. John bought a jacket and *a tie*, but he returned *the tie* soon.

b. They served *chicken* and *pork*, and I found *the chicken* much better than *the pork*.

(12a) では、ジョンがジャケットとネクタイを買ったが、そのネクタイはすぐに返したと言っている。(12b) では、鶏肉と豚肉が出たが、鶏肉の方が豚肉よりもおいしかったと言っている。要するに、*the* が名詞につくと、言及されているものが、話し手と聞き手の間で限定され、明確にされて、区別される。

また、*the* による限定には2つの場合がある。

(13) a. John bought *a guitar* and a banjo, but he gave *the guitar* to Mary.

b. John plays *the guitar* well.

(13a) の *the guitar* は、数あるギターのうち、ジョンが買ったギターと限定しているので、*the* がついている。つまり、同類集合での限定化である。一方、(13b) の *the guitar* は数ある楽器のうちで他の楽器ではなくて、ギターであると限定している。

一般に、楽器を演奏するという場合には、楽器に *the* がつくと教えられるけれども、楽器がピアノ、バイオリン、フルート、チェロ等が1つになって、オーケストラを構成することからもわかるように、それぞれの楽器が、他の楽器と対比的に限定的に用いられているからである。

(14) a. We play soccer after school.

b. Playing baseball is fun.

スポーツの場合は、個々のスポーツが、それぞれ独立したものと見なされ、あるスポーツが他のスポーツと対比的、限定的にとらえられていない。よって、*the* がつかない。

2.3 まとめ

以上まとめると次のようになる。

(15) a. *a(n) ~* : 明確な形をもつ単一の個体を表す。

b. *φ ~* : 個体として明確な形境界をもたず、単一体ではなく、連続体を表す。

c. *the ~* : 他のものから区別され、限定されて、聞き手がその指示対象を理解できるものを表す。

つまり、(15a) と (15b) の区別さえしっかりができれば、どちらにも (15c) を適用することができるのである。この単純な (15) の3つの規則さえ確実に覚えておけば、英語学

習者の冠詞の誤りは飛躍的に減るだろう。

3. より良い学習英文法の構築に向けて

従来バラバラにリストの形で提示されていた冠詞の用法が、久野・高見（2004）では統一的に説明されている。これは機能主義言語学の1つの流れである Langacker の認知文法の成果が見事に取り入れられているからである。たとえば、「明確な形をもつ」というのは、Langacker の認知文法⁴で基本的な概念をなす有界性（Boundedness）を指している。われわれが何かを知覚の対象とした時、ゲシュタルト（Gestalt）要因の働きによって、その対象は他のものと明確に区別されてくっきりと輪郭をもって浮かび上がってくるという。注意が向けられたほうが図（Figure）になり、背景となるものが地（Ground）になる。さらに、Figure と Ground を基にして、プロファイル（Profile）とベース（Base）、トラジェクター（Trajector）とランドマーク（Landmark）というような基本概念が導入される。事実に関しては、(16)のように日本語でも名詞句削除の際、先行詞に有界性の制限が見られるし、有界/非有界的に区分する認知プロセスは普遍的なものだとする実験もある⁵。

- (16) a. [大きい/な水槽] には魚がたくさんいるが、[小さい/なの [φ]] には（魚が）あまりいない。
b. * [大きい/な湖/川] には魚がたくさんいるが、[小さい/なの [φ]] には（魚が）あまりいない。

（今西 2003 : 186）

しかし、ここで注意したいのは、事実としては存在していても、「明確な形」というものを本当に定義できているのだろうかということである。実際は、きわめて曖昧でどのようなでも解釈できる可能性があるのではないだろうか。

また、連続体とはいったいどういうものなのだろうか。日本語でも英語でも次のような事実がある。

- (17) a. デモ隊が会場に流れ込んでいった。
b. 泥水がプールに流れ込んでいった。

（山梨 2000 : 166）

- (18) How much runners in this race?

（中尾 2003 : 7）

このような事実を山梨（2000）では、イメージスキーマ変換の認知プロセスで説明できるとしている。具体的にはどういうことなのだろうか。「連続体」というものが厳密に定義されているのだろうか。どうも明確にはなっていないように思われる。できるだけ少数の複雑でない規則で学習者に提示するには、(15)のような形にするのも必要な捨象かもしれないが、曖昧さが残っている⁶。そのために、実際に(15)の規則を使う際に混乱が生じるのでは困る。定義を精緻にしていけば解決される問題なのか、それともアプローチの仕方に原理的な問題があるのかは、今後の研究に委ねることにする⁷。いずれにしても、

本小論では、久野・高見（2004）のような形にすることは、学習英文法にとって飛躍的な進歩であること、しかし、それでも問題点はあることを指摘した。

注

- 1 さまざまな研究というのは、基本的に研究者を対象にしているものであって、外国人の読者が自分で冠詞の知識を得たり、それを教育に応用することを想定して書かれているものではない。初級の学習者は、さまざまな冠詞の用法をリストとして羅列している教科書や参考書にあたるのが普通である。上級の学習者はそれまでの研究の成果を取り入れている包括的な文法書や直接研究書にあたってみることができるかもしれないが、問題はある。たとえば、古典的な Christophersen (1939) の familiarity の理論は、曖昧で理解が困難であるし、構造主義言語学の Yotsukura (1970) は、規則が繁雑になりすぎている。また、発話行為論の Hawkins (1978) はそれ以降の冠詞研究で言及されないことがないほど有益であるが、理論的説明が多すぎる。さらに、Carlson (1977) を読むには形式意味論の知識が必要になる。また、生成文法の Longobardi (2001) や Bernstein (2001) のような DP 仮説による分析は、名詞が主要部移動をするのに移動先を確保するという点では興味深いかもしれないけれど、読むのに生成文法の知識が必要でもあるし、そもそも、今どの冠詞を使ったらよいのか迷っている人の役には立たない。さらに、英語教育方面からの研究、たとえば、水野（2000）などは膨大な実験を行って結果を出しているが、その結論はすぐ利用できる種類のものではない。
- 2 このような観点からすると、久野・高見（2004）の冠詞に関する章が多くを参考にしたと思われる石田（2002）も有益である。まとまりはそれ程よくないが、ミントン（1999）も参考になる。
- 3 金谷（2002）に負うところが大きい。
- 4 言語理論にはとって避けては通れない言語獲得をどう説明するかということに関して、生成文法側の非常に強力な論陣に対して、認知言語学側は、現在までのところでは明示的に示されていないようである。おそらく領域固有性を前提とせず、一般的な認知能力から獲得のメカニズムを探求していくものと思われる。これからの研究でどうなっていくのかわからないけれども、たとえば、大津（他）（2005）で領域固有性を認めない立場側からは、用法基盤モデル（Usage-Based Model）による研究で生成文法の言語獲得理論が仮定する言語獲得の論理的問題（Logical Problem of Language Acquisition）を否定できるとの主張がある。しかし、否定的証拠（Negative Evidence）が得られないということを考慮しない用法基盤モデルには、いささか疑問が残る。ところで、母語の獲得と外国語環境での外国語の学習の過程は、明らかに異なるものである。したがって、最終的に理論全体が言語獲得に関してどのような説明をするのか明確でないとしても、その途中段階で発掘された有益な知見を外国語学習に生かすのは何ら問題がないと思う。
- 5 大堀（2002）pp.214-217 を参照。

- 6 the に関しても、本来、「聞き手が理解できるものと話し手が思っている」となるはずである。
- 7 有界性に関しても、議論を他の範疇に拡張すると、範疇を超えた共通性が明らかになる。たとえば、全体を表す表現でその一部を表現できるかどうかという点において、(ia) と (ib) の対比と (iia) と (iib) の対比は平行的である。また、その背後にある、きわめて抽象的な体系の存在は、後天的に習得するものとは考えにくく、生得的に備わっているものと考えざるを得ない。Jackendoff (1990) P.29 を参照。

- (i) a. an apple
b. water
- (ii) a. John ate the sandwich.
b. John ran toward the house.

参考文献

- Bernstein, Judy B. 2001. 'The DP Hypothesis: Identifying Clausal Properties in the Nominal Domain' in Baltin, M. and Collins, C. eds. *The Handbook of Contemporary Syntactic Theory*. Blackwell. pp.537-561.
- Carlson, Gregory N. 1977. *Reference to Kinds in English*. PhD. diss. Univ. of Mass.
- Christophersen, Paul. 1939. *The Articles: A Study of Their Theory and Use in English*. Einar Munksgaard.
- Hawkins, John A. 1978. *Definiteness and Indefiniteness: A Study in Reference and Grammaticality Prediction*. Croom Helm.
- 今西典子. 2003. 「照応表現研究—普遍性と多様性の研究—」 語学教育研究所編『市河賞 36 年の軌跡』開拓社. pp.176-192.
- 石田秀雄. 2002. 『わかりやすい英語冠詞講義』大修館書店.
- Jackendoff, Ray. 1990. *Semantic Structures*. MIT Press.
- 金谷憲. 2002. 『英語授業改善のための処方箋—マクロに考えミクロに対処する』大修館書店.
- 久野璋・高見健一. 2004. 『謎解きの英文法 冠詞と名詞』くろしお出版.
- Langacker, R.W. 1987. *Foundations of Cognitive Grammar, Vol. 1*. Stanford University Press.
- Longobardi, G. 2001. 'The Structure of DPs: Some Principles, Parameters, and Problems', in Baltin, M. and Collins, C. eds. *The Handbook of Contemporary Syntactic Theory*. Blackwell. pp.562-603.
- ミントン, T. D. 1999. 『ここがおかしい日本人の英文法』研究社出版.
- 水野光晴. 2000. 『中間言語分析 英語冠詞習得の軌跡』開拓社.
- 中尾俊夫. 2003. 『変化する英語』ひつじ書房.

- 大堀壽夫．2002.『認知言語学』東京大学出版会．
- 大津由紀雄（他）．2005.「心の初期状態における言語機能の領域固有性をめぐって」第23回日本英語学会シンポジウム．
- 山梨正明．2000.『認知言語学原理』くろしお出版．
- Yotsukura, S. 1970. *The Article in English: A Structural Analysis of Usage*. Mouton.